



日本遺産『古代日本の「西の都」～東アジアとの交流拠点～』

およそ 1300 年前、筑紫の地に誕生した「西の都」大宰府。飛鳥時代に築かれた城砦を外郭に活かし、「遠の朝廷」である大宰府を中心に築かれた東アジア標準の碁盤目の都市は、政治・文化・宗教・軍事の拠点として、東アジアと日本の文化が交錯する「都」であった。

No.2 “このころの旅人” の原風景



◀この空間に大伴旅人の歌の舞台が広がっている（大宰府跡から南を望む）。

大宰帥・大伴旅人は、「梅花の宴」を催すなど、「西の都」に華やかな万葉文化を开花させました。また、時には、自らの切ない気持ちを歌に詠むひとりの歌人でした。「西の都」を万葉歌で巡れば、旅人の心の原風景に出会うことができます。

歌人・大伴旅人は、時には情緒あふれる言葉で、自らの心を歌に綴りました。大宰帥として赴任して間もない、730 年前後、長年連れ添った最愛の妻・郎女を亡くします。悲しみにくれる旅人は、朱雀大路の南の先、次田温泉（二日市温泉）に宿り、湧き出る湯に心身を癒しながら、「湯の原に 鳴く蘆鶴は 我がごとく 妹に恋ふれや 時わかず鳴く」と、鳴く鶴に妻を想う自らを重ねて哀悼の歌を詠んだのでした。また、彼を慰めるべく都から訪れた石上堅魚らと「城山道」を歩いて基肄城へ登り、眼下に広がる平野を眺めながら、心情を込めて彼らに返歌しました。

旅人は、自らの心を綴る歌詠みの大切な場として、しばしば都の境界に赴きました。そして、彼が大納言として帰京するとき、大宰府の東方、阿志岐山城を望む蘆城駅家での餞別の宴では、月夜の川の音に耳を傾け、爽やかな送別の歌を詠みました。

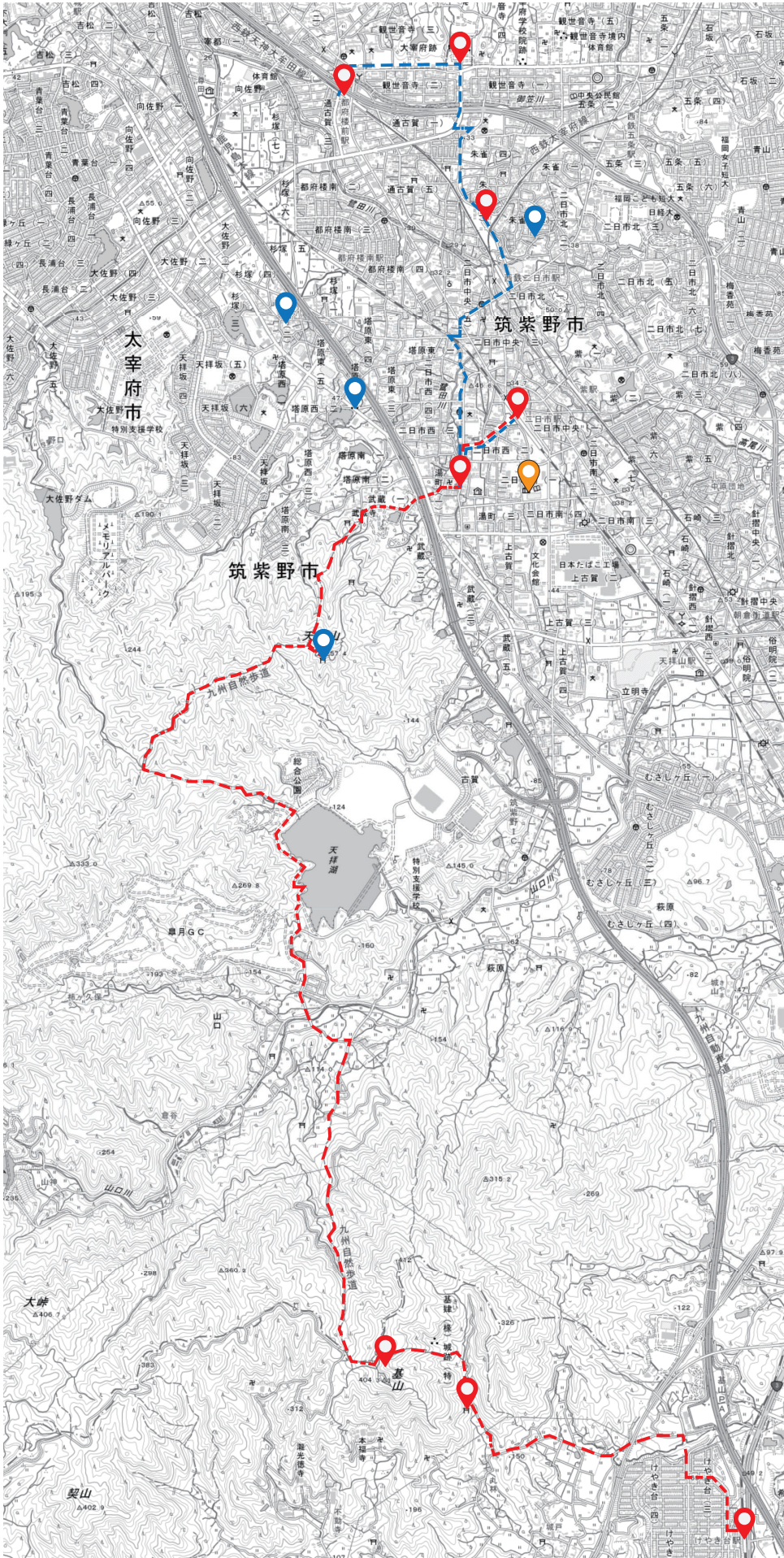
旅人は、平城京へと続く道（官道）を歩みながら、「西の都」最後の地・水城の東門に着いたとき、深い交流のあった女性・児島との別れを惜しみ、涙を拭いつつ、もう会うことのできない心の内を歌に込めました。旅人の帰京後、梅花の宴に赴いた、筑後守の葛井大成は彼に会うために通った峠越の道（官道）を歩く寂しさを歌に詠みました。歌は、いつまでも「西の都」と旅人をつなぎ続けたのです。



▲万葉の時代から続く湯は、今も訪れる人々の交流の場となっている。

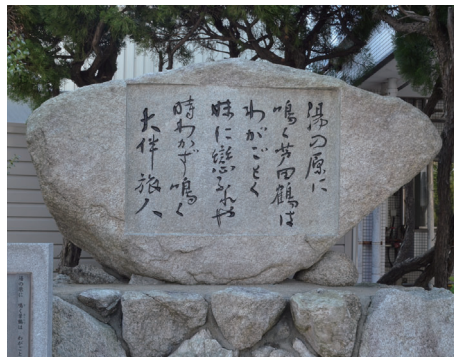


▲基肄城跡に立つと、旅人の眼差しに想いを重ねることができる。



- 西鉄都府楼前駅
- 大宰府跡（政庁跡）
- 大宰府展示館
- 大宰府跡（客館跡）
- 次田温泉（二日市温泉）
- JR 二日市駅

- JR けやき台駅
- 基肄城跡（南水門）
- 基肄城跡（山頂）
- 天拝山
- 次田温泉（二日市温泉）
- JR 二日市駅



▲二日市温泉に建つ大伴旅人の歌碑。

日本遺産『古代日本の「西の都」～東アジアとの交流拠点～』は、平成 27（2015）年に文化庁から認定を受け、その範囲は福岡県筑紫野市・春日市・大野城市・太宰府市・那珂川市・宇美町、佐賀県基山町に広がっています。

編集 「西の都」日本遺産活性化協議会（事務局：福岡県教育庁教育総務部文化財保護課）

詳しく知りたい方は
公式ホームページまで

西の都 🔍 検索